学 校 だ よ り　6月号

文京区立第一中学校　令和５年６月２０日(火)

積　む

校長　田島　佳子

礎（いしずえ）：建物をその上に建てる土台石。基礎となる大事な物事。

人それぞれ、心惹かれるものがあると思います。コレクターと呼ばれる人たちは好きなものや興味のあるものを集めています。また写真が好きな人は各地に行って、様々な風景や出来事、建物などを写真として切り取っています。鉄道が好きな人たちもいます。

私はいつの頃からかは覚えていないのですが、石垣に心をもっていかれてしまいました。お城の天守閣の石垣、城壁の石垣、武家屋敷の石垣、島に残っている民家の石垣などです。石が積まれている姿に心が惹かれます。なぜなのでしょう。その中でも、きれいに規則正しく積まれているものよりも、形や大きさがまちまちで加工されていないそのままの石が積まれて、何百年もびくともしないその姿に畏敬の念さえ覚えるのです。戦国時代の初めの頃は山城が多く、そのうち丈夫な城壁や濠を巡らせた平城へと変わっていきます。今でもその時代の石垣を見ることができます。天空の城と呼ばれる竹田城、国宝の松本城、昭和の修復で直した部分は地震で崩れたのに、それよりはるか前に積んだにもかかわらず、崩れなかった石垣が残る熊本城。これらの石垣は「穴太（あのう）積み」と呼ばれています。穴太衆と呼ばれていた石工集団が積んだものです。ひとつとして同じ石はありません。バラバラです。それなのに、完璧に収まっているのです。

滋賀県の琵琶湖のほとりに坂本という地域があります。叡山電鉄の坂本駅です。比叡山に登るケーブルカーもあります。町はとても静かで観光客はほとんどいません。ここは、当時の穴太衆が積んだ石垣が多く残っている場所です。穴太衆の石垣を現代も受け継いでいるのは、たった一軒の建設業者です。口頭でしかその技を伝えていません。石の積み方には決まりがあるそうですが、大事な教えはただ一つ「石の声を聴く」こと。石が、自分の収まる場所を知っている、というのです。

石垣は基礎になるものです。上に何を積み上げても、何百年経っても、びくともしない丈夫な石垣の石は、欠けてはならないし、ぴったりとそこにはまるものでなくてはなりません。

学習でも運動でもそうです。基礎が大事と言われる所以（ゆえん）です。

あなたは、積み上げていますか。

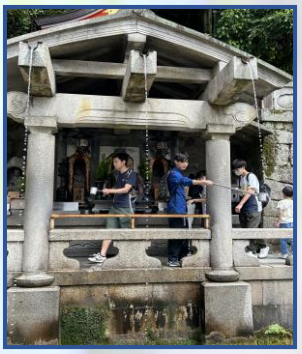
「上に何が積まれてもびくともしない丈夫な礎を。」

今年もやります。一中祭

７月２２日(土)１７時から２０時まで校庭（雨天時　体育館）で、昨年に引き続きお祭りを開催いたします。５月１３日、６月１０日には町会や育成会などの地域の方に参加いただき実行委員会を行いました。先着順ですが、うちわのプレゼントもあります。盆踊り、縁日、発表を計画しています。縁日ブースは昨年より拡大します。

運動会　５月２５日

修学旅行



自分に〇

副校長　　伊木　文枝

待ちに待った運動会。どの種目にも一生懸命取り組む皆さんの姿が印象的でした。予行よりもレベルアップした「本気」の皆さんが目の前にいました。とても感動し、笑顔になりました。

大塚小学校の運動会では、20 名以上の生徒の皆さんがボランティアで手伝いをしてくれました。競技中の誘導、座席での掌握、トイレへの引率等、一生懸命小学生の面倒を見ていました。その姿に心がほっこりしました。

さて、皆さんは「自分の一生懸命取り組んでいる姿が人に喜びや感動を与える」ということに気づいていますか？だから自然と拍手が沸いたり、感謝の言葉が飛び交ったりするのです。これは当たり前のことではありません。

この「気づく」ということが、生きていく上でじつはとても大事な作業なのです。なぜなら、「気づけば行動が変わる」からです。毎日の生活の中で、どんな小さなことでもいいですから、「気づく」ことに目を向けてみましょう。そして、気づくことができたら、気づいた自分に〇をあげてください。そして、自分や自分のまわりにある「いいこと」にも、いっぱい気づいて、見つけて、探し出してみてください。自分で気づき、気づいた自分に〇を出す。「それでいいんだ」と自分をまるごと肯定する。その積み重ねによって、自分の気持ちや考え方に変化が生まれ、それが成長につながっていきます。

自分に〇が出せないと、他人と比べ始めて、落ち込んだり批判したりして苦しくなっていきます。いいことに気づくためには、普段から丁寧に、楽しみながら生きる姿勢が大切です。人生は上がったり下がったりの繰り返しです。マイナスな出来事も味わい楽しんでしまうのです。どんなときでも、どんな自分であっても、いつでも「〇」を出せる自分でいて欲しいと願っています。

ふれあい月間（年間３回）
安心して学校生活がおくれるように、アンケートや道徳の授業、学活、集会等で様々な取り組みを行っています。